

こころる便り

第231号

令和元年6月

〒679-1434
兵庫県たつの市新宮町大屋六六ハ一十二
株式会社 新宮運送グループ
代表/木南 一志
kiminami@shingu.co.jp
電話 0791-75-1212

一回で終わる

令和という新しい時代はどうかと、百年後の子孫が聞いてきたらどう答えますか。

明治という大変革を越えてきたあの時代はどうかであったかと思えます。その日その日を懸命に生き切ることこそ、本気で生きた証になるのではないかと江戸から明治にかけての書物に触れると感じさせられます。

働き方改革で休みばかりが増えて、仕事を通じて人間を磨くことなどとても難しい時代背景になってきました。我が国には、人生の中で一番時間を使うのが「仕事」ですから、そこで人間形成もなされていくとしてきた歴史があります。

私は複写ハガキを書いてご縁のある方とやり取りをしています。ハガキは、相手の時間を取らないツールでもありますので、届いたハガキといつ向き合おうと自分の自由です。最初一枚書くのに、ああでもない、こうでもない、と悩んで時間ばかりがかかっていました。今は五分あれば一枚書けるくらいになりました。から、日に十枚くらいは書きます。暑いですが、寒いですがね。という内容はできるだけ書かないようにしていますから、枚数だけを目指しているわけではありません。ハガキという限られ

たスペースに自分の思いや考えを相手の方に伝わるようにと考えるだけで、とても簡単にできることではないとわかっていただけはなりません。それもぶつつけ本番ですから、それなりに失敗を重ねてこないことには、五分で一枚など、そう楽にできるようにはなりません。以前は、社員の皆さんの誕生日に合うように届ける誕生日ハガキを書いておりました。今は、S・D・E・C運動の無事故、無違反達成時のハガキとなっていますので社内向けはぜひぶん減りました。

このハガキを通じて気づかされたことがあります。ぶつつけ本番の一回限りということではありません。この真剣さが「仕事」にも言えるのではないかと思うのです。一回で確実に自分に与えられた「仕事」を終わる。その為には、実力を磨かないとミスやトラブルを生んでしまいます。実力を磨くために何が必要か。それは、小手先の技術ではありません。技術力も大切な要素ではありませんが、それよりも大切なことがあります。そこを見つけて出すのが「仕事」でもあるのです。

いい「仕事」を通じて、世の中を良くする人になりましょう。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拜

尋常小學修身書 卷五 兒童用

第二十一課 度量

西郷隆盛が江戸の鹿兒島藩の屋敷に住んで居た頃、或日友人や力士を集めて、庭で相撲をとつてゐると、取次の者が来て、「福井藩士で橋本左内といふ人が見えて、ぜひお目にかかりたいと申されます。」と言ひました。一室に案内させ、着物をきかへて會つて見ると、左内は二十歳あまりの、色の白い、女のやうなやさしい若者でした。隆盛は心の中で、これではさほどの人物ではあるまいと見くびつて、あまりいいないにあらひませんでした。左内は輕蔑されてゐることをさとりましたが、少しも氣にかけず、「あなたがこれまで國家の事にいろいろお骨折りになつてゐると聞いて、したはしく思つておました。私もあなたの教を受けて、及ばずながら、國家の爲に盡したいと思ひます。」と言ひました。隆盛はそれら顔で、「いや、それは大へんなお間違です。私のやうな馬鹿者が國家の爲をはかるなどとは、思ひもよらぬことです。たゞ相撲が好きで、ごらん通りの、若者とも一しよに、毎日相撲をとつてゐるばかりです。」と言つて、相手にしませんでした。それでも左内は落ちついて、「あなたの御精神はよく承知してゐます。そんなにお隠しなさらずに、どうぞうちあけていたゞきたい。」と言ひ、眞心をこめて、自分の意見を述べました。隆盛はちつとそれを聞いてゐたが、左内の考が如何にもしつかりしてゐるので、すつかり感心してしまひました。隆盛は左内が歸つてから、友人に向ひ、「橋本はまだ年は若いですが、意見は實にりつぱなものだ。みかけがあまりやさしいので、はじめ取りあはなかつたのは、自分の大きな過であつた。」と言つて、深く恥ぢました。



隆盛は翌朝すぐに左内をたづねて行つて、「昨日はまことに失禮を致しました。どうかおとがめなく、これからはお心安く願ひたい。」と言つてわびました。それから二人は親しく交り、心をあはせて國家の爲に盡しました。左内が死んだ後まで、隆盛は、「學問も人物も自分がとても及ばないと思つた者が二人ある。一人は先輩の藤田東湖で、一人は友人の橋本左内だ。」と言つてほめました。

NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。